

文の成分と文の姿

楊 詒 人

要 約

句子成分和句子形態

楊 詘人

時枝誠記の套匣式句子結構理論認為句子成分為包容和被包容的關係；而北原保雄則認為句子的各種補充修飾成分與構成謂語部的各附加成分分別呼應，從而在結構上形成相應的不同層次。但筆者認為句子在語義和結構上並不存在任何層次。

為此，首先對句子中謂語以外的成分進行探討，所謂的連用成分按其功能可以分為補充成分和修飾成分 2 類。日語用言（形容詞・形容動詞・動詞）在句中占支配地位，因而所有其他成分都是依存于用言的從屬成分。根據這一依存理論，補充成分又可分為主要補充成分和次要補充成分 2 類。而修飾成分按照其修飾功能，還可分為內容修飾成分和陳述修飾成分 2 類。

其次，按照依存理論，對用言的組配數限（valency）進行探討，作為獨立詞的用言可以支配補充成分，且具有不同的組配數限，而且，當他們下接所謂的助動詞「れる・られる」「せる・させる」「たい」「そうだ（樣態）」等後，其組配數限有時會發生變化，所支配的成分在格關係上也會出現交替現象，由此導出上述所謂助動詞只是複合語尾的結論。

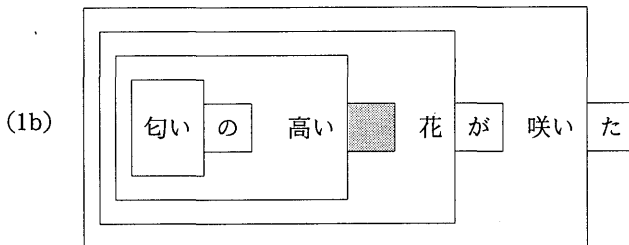
最後，根據上述依存理論，得出句中各種成分在並不存在時枝誠記所說的包容和被包容的關係，也不存在北原保雄所說的具有相應層次的結論。但根據語言的本質特徵，筆者認為不是在語義和結構上，而是在社會交際功能方面，即在語言主體的表達上，句子的形態存在 3 個層次。

1. はじめに

時枝誠記（1941）は、詞は概念過程を含むもの、辞は概念過程を含まぬものであり、また、詞は常に辞に包まれ、詞＋辞の形で表現するという言語過程説にしたがって、文の入子型構造形式をもって、文の構造を解明しようとする方法を打ち出された。その入子型構造形式とは、すなわち例えば

（1a）匂いの高い花が咲いた。

という文は、まず「匂い」という詞が「の」という辞に包まれて一つの単位——句になり、その句がまた「高い」という詞に包摂されて大きな詞となり、そのようにできた大きな詞が零記号辞（「■」）によって包まれてより大きな句になり、それによってできた句「匂いの高い」がまた「花」に包摂されてより大きな詞になり……というように段々包まれていって、最後に辞「た」に包まれて文ができるというような形式であり、図示すれば

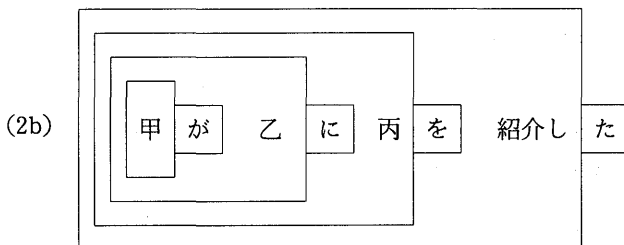


のようになる。

しかし、このような入子型構造形式では文の構造を本当に解明することができるかどうか、かなり疑問があるように思われる。というのは、例えば

（2a）甲が乙に丙を紹介した。

というような文は、もし無理に入子型構造形式で示せば、おそらく

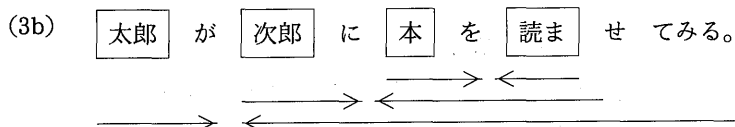


のように、文中の格成分間の関係は、包み込まれるような重層的な構造を持つものになるであろう。

これに対して、北原保雄（1981：96）は、

（3a）太郎が次郎に本を読ませてみる。

というような文の構造を



のように図示し、『～を』といういわば目的格の展叙と関係する統叙が、他の統叙と比べて、比較的上位（内側）に、また、『～が』という主格の展叙と関係する統叙がそれよりも下位（外側）に位置していること、そうして、上位（内側）に位置する統叙ほど、初めにかつ緊密にそれと対応するところの展叙と関係し結合するということだけは、以上のささやかな考察からも、言えそうである。」とし、更に、「これらの展叙と統叙とが一定の順序をもって重層的かつ立体的に関係して、文が構成されると解釈されるのである。」とされている。

しかし、はたして文の格成分が包み込まれる関係にあるのか、また「展叙と統叙とが一定の順序をもって重層的かつ立体的に関係」しているのか、はなはだ疑問である。よって以下において、日本語の文における成分、用言のもつ結合能力である結合価、文の階層などについて逐次考察し、文の姿を考えたい。

2. 文の成分

2.1. 連用成分

連用修飾成分について、渡辺実（1991：155）は、「構文的職能という点からいうなら、連用修飾語はその中に全く異質のものを雑然と含むような、整理されないものにすぎなかったと評してよいと思われる。ちょうど品詞論における未整理が副詞にしわよせされたのと同様に、連用修飾語は構文論の未整理のしわよせの場所、構文論のはきだめだったのである。」と述べ、構文的職能により、従来の連用修飾語とされてきたものを、連用成分、並列成分、接続成分、誘導成分の四つに分類され、そういった成分については、体言+X 助詞、用言の X 形、X 副詞の三様の形態をとられた。

しかし、例えば「体言+連用助詞」は、はたして連用成分であろうか。山田孝雄（1936）は連用修飾成分を補格と修飾格とに区別し、前者が用言の意義を補充するものであるとし、後者が用言の表す観念を一層精密に示すものであるとされている。松下大三郎（1930：701）は「およそ詞が他詞に従属するに修飾と補充と有る。……補充は他語の相対性を絶対化するものである。然るに修飾は他語の欠陥を補充するのではない。他語を調節してその意義を詳しくするものである。」と述べている。また、北原保雄（1981：176）は、以上両氏の説をふまえて、渡辺の連用成分を補充成分と修飾成分とに二分し、その形態と意味との相違を次頁の表のように示した。

筆者は全部ではないが、連用成分を補充成分と修飾成分とに二分する考えには賛成する。というのは、矢沢真人（1991）によると、意味統語論的なレベルにおいては、「補充成分は事物的概念を実質概念とし、副詞的修飾成分は状態や情意、程度などの概念を実質概念とするという

	補 充 成 分	連用修飾成分
形態	体言，あるいはそれに準ずるものに格助詞が付いたもの	形容詞・形容動詞の連用形あるいは副詞
意味	述語(統括成分)の不完全な意味を補充するもの	述語の意味を精密にするもの

違いが見られる」とされているからである。

また，機能統語論的なレベルにおいては，「補充語と述語は格関係によって結びつけられており，補充語には，述語の表す動きや状態などを成立させるのに必要な成員を補充するという機能（補充機能）が，また，述語の方にも，それを受けてまとめる機能（統括機能）が認められるのに対し，副詞的修飾語は，修飾対象となる述語の表す概念に，自らの概念を修飾内容として結びつける機能（修飾機能）をもつのであって，これによって，述語に対し一方的に関係を結んでいる。述語の方は，修飾される素材を提供するだけで，そこには，統括機能のような積極的な機能は見受けられない」（矢沢真人1991）。

更に，形態統語論的なレベルにおいては，「～が」＝主格，「～を」＝直接目的格，「～に」＝間接目的格といった名詞の述語に対する統語上の形態に関するものがあって，補充成分と述語成分との論理的な関係が明示されるが，修飾成分と述語成分の間には，こういった論理的な関係が見られない。したがって，補充成分と修飾成分とは異質なものであるということである。では，同じく補充成分でも，はたして，全てが同じレベルのものと言えるであろうか。

2.2. 文核を構成する主要補充成分と副次的補充成分

2.2.1. 文核を構成する主要補充成分

補充成分には，主格・直接目的格・間接目的格（対象格とも言う）・具格・奪格・共同格・与格・離格・着格・位格・原因格・時格などがあって，それぞれ述語成分に対しての格関係を示す格成分である。こういった格成分は普通，それぞれの格助詞の下接によって機能するのであるが，そのうちの一部は，必ずしも格助詞によって実現されるわけではなく，格助詞なしでも構成され得るのである。例えば

（４）太郎が次郎に本をやる。

（５）冬が寒い。

のような文も，「太郎 次郎に本 やる」「冬 寒い」だけで，その表す意味は十分に分かるし，またこのようないわゆる格助詞省略の表現は，日常の言語生活においてもよく見られる。

なぜこういった格助詞の省略ができるかという原因は述語用言に求められる。

用言は，意味論的・統語論的には，動作・作用・性質・状態・情意などといった実質概念を持っているが，それぞれの用言の概念のあり方にしたがって，その概念を成り立たせるための論理的要素が既に内包されている。例えば，例（４）の動詞「やる」には，「誰かが（主体）誰かに（相手）何かを（対象）やる」という動作概念を持っているから，その動作の主体と相

手及び対象なしでは、「やる」という動作は成り立たないのである。もし、文（４）を「やる」のみで表現するならば、必ずといっていいほど、「誰が」「誰に」「何を」という質問が出されるに違いない。つまり、こういった成分なしでは、具体的な叙述内容が完全なものでなくなるのである（質問に対する答えは別である）。したがって、ここでいう格関係は、述語成分と名詞句の共起関係により成立される関係であり、これによる格成分は、個々の述語成分の持っているそれぞれの実質概念の個性によって、述語成分の表している動きや状態や関係の実現のために、あらかじめ選択的に決まっている関与者を表す成分である。こういった格成分は述語成分と緊密に結びついたものであり、述語成分にとっては意味を全うするのに必須不可欠のものである。したがって、主格・直接目的格・間接目的格といった格成分は、述語成分に支配され、しかも強く依存している主要補充分成分である。つまり、こういった主要補充分成分と述語成分との間には、一種の強い依存関係（dependency）を持っているから、特に格助詞「が」「を」が省略されても、意義の面においてその表すべき関係概念は自明である。渡辺実（1971）は、「が」「に」「を」といった省略されうる助詞を強展叙連用助詞、その他の連用助詞を弱展叙の助詞とされている。これにより、強展叙の助詞「が」「に」「を」の付いた成分が主要補充分成分であり、表現する時に省略しても文の意味が依然として分かることから、こういった成分は主要補充分成分であることが逆に証明されるのであろう。ちなみに、ここでいう主要補充分成分を、寺村秀夫（1982）は、必要補語とされている。

ここで、実質概念をもつそれぞれの述語成分とその述語成分によりあらかじめ選択的に規定し共起された主要補充分成分とによって形成されたものを文核（sentence nucleus）と呼んでおく。文核は機能統語論的には、述語成分の統括機能により、主格・直接目的格・間接目的格など主要補充分成分の持つ各種補充分機能と関係し、補充＝統括機能を成り立たせて形成された単文である。『話しことばの文型（２）』（1963）の術語を借りて言えば、「骨ぐみ構文」になるのである。

主要補充分成分は、述語成分の個々の実質概念の個性により、文核の形成に欠かせない成分であると思われる。上述の主格成分、直接目的格成分、間接目的格成分のほかに、また例えば

（６）太郎が花子と結婚した。

（７）太郎が花子に本を貸した。

（８）私は金がほしい。

（９）太郎は本を机に置いて、急いで家を出た。

などの文における「花子と」「花子に」「金が」「机に」「家を」も、主要補充分成分である。

2.2.2. 副次的補充分成分

しかし、文における成分は主要補充分成分のみでなく、また、文核を構成する主要補充分成分のほかに、例えば時格、位格、原因格、道具格など副次的な成分がある。こういった成分は、主要補充分成分のように文中で表現されなくても、まとまった叙述内容になるし、また聞き手に質問されないものである。

まず原因格についてであるが、例えば

(10) 太郎が病気で欠席した。

において、「病気で」は格助詞「で」をもって原因を表している成分であり、「欠席する」という述語動詞に欠かせない格成分のように見えるが、しかるに、この文は、また、例えば

(11) 太郎が病気のため欠席した。

ように、「～のため」でも表現できるし、更にまた

(12) 太郎が病気なので欠席した

のように、判断の助動詞「だ」の連体形+接続助詞「ので」によっても表現できるのである。つまり、この場合の「～で」は必ずしも欠かせない主要補充成分ではなく、述語成分とは緊密に結びついたものではないと言えよう。

また、時格成分については、例えば、

(13) 2日前に太郎が交通事故で入院した。

(14) 来月の1日に国会が召集されるそうだ。

というような文における「2日前に」「来月の1日に」は時格成分であるが、これはすべての述語成分に共起され得る格成分であって、述語成分の個々の実質概念によらないものであるがために、主要補充成分にはならないのである。ちなみに、例えば

(15) 2日前 太郎が交通事故で入院した。

(16) 来月の1日 国会が召集されるそうだ。

における「2日間」「来月の1日」は、北原保雄（1983）はそれらが時格補充成分ではなく、時の修飾成分であるとした。

更に、位格「～で」も、例えば

(17) 1995年1月17日 阪神地区で大地震があった。

という文における「阪神地区で」は、所を表す成分ではあるが、これはすべての述語成分（述語動詞）にあっては共起可能な存在であり、やはり副次的な補充成分である。ただし、例えば

(18) 犯人は自動車で東京に逃げた。

などの文における「東京に」は、前述した「家を」と同じく、主要補充格成分であるが、「自動車で」は副次的な補充成分である。というのは、「犯人は東京に逃げた」と聞いては、必ずしも「何で」といった質問は出されないはずである。

なお、所有格「～の」はいわゆる連体修飾成分（間接成分）を形成するものであるから、主要補充成分からは除外されるべきである。

以上をまとめてみると、主要補充成分は、その生起が個々の述語成分の実質概念によってそれぞれあらかじめ規定され、述語の語義構造に既に内包された主要関与者である。また、述語成分と緊密に結びついたものであり、述語成分に強く依存しているものである。それに対して、副次的補充成分はこの主要補充成分の条件を満たさないのみでなく、述語成分とは緊密に結びつくのではなく、すべての述語用言にあって共起可能な遊離的な存在であり、しかも外的背景として成立したものであると言える。

2.3. 連用修飾成分

前述したように、渡辺実氏（1971）は、修飾成分を連用成分、並列成分、接続成分、誘導成分の4つに分類し、いずれも統叙成分に係っていくものとされたのであるが、北原保雄（1981）は、連用修飾成分を情態修飾成分・程度修飾成分・時の修飾成分・叙述修飾成分・陳述修飾成分に5分類し、その修飾対象の範囲をそれぞれ異にするのである。

筆者は、叙述の含量を豊富にする修飾成分（略して、内容修飾成分）と含量の増減を一切しない陳述修飾成分とに、連用修飾成分を2分類したい。

内容修飾成分は、北原保雄の情態修飾成分・程度修飾成分・時の修飾成分・叙述修飾成分にあたり、陳述修飾成分は、北原保雄の陳述修飾成分と同じくする成分である。前者は表現の含量を豊富にするものであり、いわゆるプロポジション（言表事態）に属し、後者は言語主体の態度を修飾するものであり、いわゆるモダリティ（言表態度）である。例えば（本節においては殆ど北原保雄（1981）のあげた例を利用した）、

（19）先生が太郎に熱心に本を読ませる。

における「熱心に」は「読ませる」を修飾限定していることは、次の理由から分かる。つまり、常識的に考えれば、もし「太郎が熱心に本を読む」ならば、「先生が」わざわざ「読ませる」ことはないであろうし、また、上述したように、「先生が」「太郎に」は、いずれも述語成分の主要補充成分であり、その生起が述語成分の実質概念によってあらかじめ規定され、述語成分の語義構造に既に内包されているものであるから、意味的には、述語成分を修飾限定することは、すなわち、その述語成分の語彙的意味を修飾限定していることであると解し得ると思われる。また、

（20）珍しく4月に雪が降った。

における「珍しく」は、「4月に雪が降ったということは珍しいことだ」というように解し得るが、また、「4月に雪が珍しく降った」とも言えるであろうから、「珍しく」はやはり述語成分を修飾限定しているであろうと思われる。

以上はいずれも述語成分のまとめた含量を豊富にし、外延を狭くする修飾成分である。

一方、陳述修飾成分である陳述副詞は、例えば

（21）きっと成功するだろう。

のように、言語主体の態度（ここでは推し量る）を示すものであり、述語成分のまとめた叙述内容は、含量的に一切の増減の影響を受けないから、やはり陳述のあり方を修飾限定しているのである。

3. 用言の結合価

結合価（valency）理論は、フランスの言語学者テニエール（Tesnère, Lucien）がその創始者である。「<結合価文法>とは、実質的な語義を有する語詞の有する潜在的な意味論的一統語論的な結合能力を中心にして、文の形成をとらえていこうとするものである。この種の結合能力を、語詞の<結合価>と呼ぶ」（仁田良雄1974）。

既に2.2.1.に述べたように、主要補充成分は、個々の述語用言の持っているそれぞれの実質概念の個性によって、述語用言の表している動きや状態や関係の実現のために、あらかじめ選択的に決まっており、強く依存しているのである。つまり、個々の述語用言は、その実質概念により、ある種の格成分をあらかじめ規定すると同時に、それと同じレベルの格成分に属する他の格成分との共起を拒絶するのである。この意味において、述語用言はあたかも化学における原子の原子価のように、特定の、いくつかの格成分と結びつく結合能力である結合価を具有するのである。上述したように、この、結びつくいくつかの格成分は、あくまでも述語用言の実質概念によって共起関係においてあらかじめ規定されたもののみに限るのである。例えば

(22) 太郎が手を洗う。

(23) *太郎に手を洗う。

のように、(22) は文として自然であるが、(23) は非文法的である。つまり、「洗う」という動詞は、動作主（主格成分）と動作の対象（直接目的格成分）といった役割を担った成分を取るが、動作の受け手（間接目的格成分）という役割を担った成分を取らないのである。

3.1. 動詞の結合価

動詞の結合能力である結合価は、個々の動詞の語義によって違う。

まず結合価0の動詞についてであるが、意味論的一統語論的には補充成分が共起されず、それ自身で完全な意味を表すことのできるものである。例えば英語の rain は、既に「雨が降る」という語彙的な意味を持っているから、その結合価は0になる (David Crystal 1985)。また、日本語の「停電する」も結合価0の動詞である。たしかに

(24) 明日午前8時から午後5時まで停電するそうだ。

のように、「明日午前8時から午後5時まで」が付いているが、それは、前述したように、時を表す副次的補充成分であり、どの述語用言とも共起できるものであるから、「停電する」の必須不可欠の主要補充成分にはならないのである。

結合価1の動詞は、主格成分を一つだけ支配するものであり、例えば

(25) 子供が遊ぶ。

(26) 水が流れる。

などのように、動作を表す動詞によって支配されている成分は、動作主（状態主）である主格成分を一つ取るだけで十分である。

結合価2の動詞は格成分を2つ支配する動詞である。例えば

(27) 太郎が歌を歌う。

(28) 太郎が花子と結婚する。

においては、(27) は動作主（主格）と動作の対象（直接目的格）を取り、(28) は動作主と動作の相手（共同格）を取る。なお、(28) の場合、例えば

(29) 太郎が花子に接吻する

のように、動作の受け手を取る場合もある。この場合、「～と」をとるか、「～に」を取るかは

動詞の具有する語義によるものである。

結合価3の動詞は例えば

(30) 太郎が花子に恋文を出した。

のように、動作主（主格）・動作の受け手（間接目的格）・動作の対象（直接目的格）など3つの格成分を取る動詞である。

3.2. 形容詞・形容動詞の結合価

結合価文法はもともと動詞の結合能力についての文法論であるが、同じ用言である形容詞・形容動詞の場合はどうであろう。

形容詞と形容動詞は、物事の性質・状態を表す語詞であるが、その物事の性質・状態の成立には必ずと言っていいほど、機能的に関与している名詞句が必要である。その名詞句は格に関わりのあるものであり、格助詞を帯びた名詞句は格成分であるということは言うまでもなからう。したがって、形容詞述語文・形容動詞述語文においても形容詞または形容動詞と意味論的一統語論的に相関関係のある格成分もまた述語動詞の場合と同じく、共起され得るのである。したがって、形容詞・形容動詞にも結合能力を具有すると思われる。

結合価1の形容詞・形容動詞は例えば

(31) 富士山が高い。

(32) 太郎が丈夫だ。

のように、形容詞「高い」と形容動詞「丈夫だ」とも状態主（主格成分）だけを取るのである。しかし、例えば(32)が

(33) 太郎は体が丈夫だ。

の場合はどうであろうかという問題が生じるが、これは、本来

(34) 太郎の体が丈夫だ。

という文における「太郎」を提題した表現であり、語義的に性質・状態を表す形容詞・形容動詞は、やはり主格だけを支配しているのでであると解釈してよからう。

形容詞・形容動詞は全体として情態を表す語詞である。上述した形容詞・形容動詞は客観的な属性を表現したものである。しかし、形容詞・形容動詞はただ性質・状態を表すのみではなく、また、主観的な情意をも表すのである（時枝誠記1941）。こういった情意を表現している個々の述語形容詞・述語形容動詞は、その情意を表す主体（主格成分）・対象（直接目的格）と、意味論的一統語論的に共起し得るのである。つまり、情意を表す形容詞・形容動詞の結合価は2である。

(35) 私は母が恋しい。

(36) 太郎は花子が好きだ。

しかし、例えば(37)の「花子が好きだ」における「花子が」は主格助詞「が」が付いて、それは直接目的語でなく、主語、または対象語ではないかという疑問が生じるが、それは、次の例によって考えれば問題は解決できるであろう。

(37) 太郎は花子を好く。

つまり、形容動詞性述語に「好く」に近い動詞性を持つもので、意味論的一統語論的に考えれば、「花子が」は直接目的語にすぎないのである。

以上をもって、形容詞・形容動詞は、語義的性格上、その結合価は大体1価か2価に限られる。

3.3. 動詞に複合語尾が付いた場合の結合価

独立語としての動詞の結合価については上述した通りであるが、渡辺氏(1971)が分類された乙類第1種助動詞「せる・させる」「れる・られる」「たい」「そうだ(様態)」が付いた複合語の場合、その結合価はどうなるかについて触れてみたい。例えば

(38) 花子が走る。 (基本文)

(39) 太郎が花子に走らせる。 (使役文)

(40) 花子が本を読む。 (基本文)

(41) 太郎が花子に本を読ませる。 (使役文)

ように、動作性述語動詞は、「せる・させる」が付くと、格交替が見られ、語性が変わり、その結合価は1価増になる。この原因は、使役の役割を担った「せる・させる」と述語動詞の語彙的意味に求められる。それは「ある事象を述べる文(基本となる文)に別の関与者(この関与者は典型的には人間である)が加わり、その関与者の立場からその事象を成立させる」(村木新次郎1991)ことと、述語動詞が動作性動詞で、使役文には動作主が2つ併存の必要があるからである。しかし、

(42) 太郎は借金に悩んでいる。 (基本文)

(43) 借金は太郎を悩ませている。 (使役文)

(44) 太郎はその物語に感動した。 (基本文)

(45) その物語は太郎を感動させた。 (使役文)

の場合は、語性が変わり、格交替も見られるが、結合価の増減は見られない。それは述語動詞が感情を表す動詞で、基本文の動作主が非行為主で、使役文の動作主が原因または運動を誘発する物事だからであり、関与者の格形式を交替させるのみで表現できるわけである(村木新次郎1991)。一方、

(46) 雨が降った。 (基本文)

(47) 太郎が雨に降られた。 (受動文)

(48) 太郎が花子を殴った。 (基本文)

(49) 花子が次郎に殴られた。 (受動文)

(50) 太郎が 故郷をしのぶ。 (基本文)

(51) 太郎に(は)故郷がしのばれる。 (自発文)

(52) 太郎が中国語を読む。 (基本文)

(53) 太郎に中国語が読まれる。 (可能文)

(54) 先生が本を読む。 (基本文)

(55) 先生が本を読まれる。 (尊敬文)

などの例を見て分かるように、同じ述語動詞であるが、「れる・られる」が付くと、その結合価は、(47)においては1価増になるが、(49)(51)(53)(55)は増減しない。この原因も「れる・られる」の性格によるものである。(47)は間接受動文であり、意味的には対応する基本文と同じ状態文であるが、表現する事象が違い、迷惑を受けた状態主が必要で、関与者の数が基本文それより1つ多く必要になるのである。(49)(51)(53)はそれぞれ受身文、可能文、自発文で、みな状態文であるから、状態主が必要であるが、それと対応する基本文は行為者を中心に述べた文で、動作主が必要なのである。したがって、関与者の間で格形式の交替が行われたのみでよいのである。(55)は、それと対応する基本文と意味的にも統語論的にも変わらない文であり、ただ話題に出る人物に敬意を払うだけであるから、結合価が増減しないのである。(55)以外、動詞の語性が変わり、格交替も見られる。

「たい」「そうだ(様態)」については、例えば、

(56) 太郎がお茶を飲む。

(57) 太郎がお茶が／を飲みたい。

(58) 太郎が泣く。

(59) 太郎が泣きそう。

などの文を見ても分かるように、基本文の述語動詞は、希望の語義をもつ「たい」の下接により、形容詞的な語性になって、格形式の交替が見られ、様態を表す「そうだ」の下接で形容動詞的語性になり(佐伯哲夫1991)、それらの述語用言の結合価は変わらない。それは、「たい」「そうだ」の付いた複合語はいずれも情態性形容詞・形容動詞に変わったからであると思われる。

以上を見ても分かるように、「れる・られる」「せる・させる」「たい」「そうだ(様態)」が用言に下接することにより、補充成分の格交替が見られ、しかも渡辺実(1971)いずれも叙述内容にかかわるものであるとされている。したがって、こういった語はみな複合語尾にすぎず、普通の接尾語である「付く」「付ける」「安い」などと同じ役割を果たしているのである。つまり、例えば

(60) 太郎がネクタイを結ぶ。

(61) 太郎が枝におみくじを結びつける。

(62) 太郎が政治家に／と結びつく。

(63) 太郎が数字を間違える。

(64) 数字が間違えやすい。

のように、接尾語の下接によってできた派生語と同じく、その結合価が変わる場合もあるし、また、補充成分の格交替も見られるのである。しかも、それぞれの複合語は、1つの述語用言として補充成分を支配しているのである。こういったいわゆる助動詞は助動詞ではなく、複合語尾だという意見は、山田孝雄(1936)以来、多くの学者によって出されており、ここで論を重

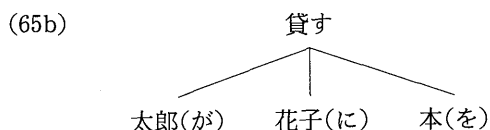
ねる必要はないであろう。

4. 文の階層

既に1で紹介したように、時枝誠記は文の成分が包み込まれる入子型構造形式を提出し、北原保雄は、文の補充成分と統括成分とは対応した順序・階層があると認めるが、筆者はこれらの見解には賛成しがたい。少なくとも文核にはこういった階層がないと思われる。既に述べてきたように、述語成分は補充成分という格成分を支配しているものであるということから、補充成分は述語成分に従属した下位成分であり、しかも述語用言に依存しているということは言うまでもないことであろう。例えば

(65a) 太郎が花子に本を貸す。

という文の構造様式は、図示すれば、

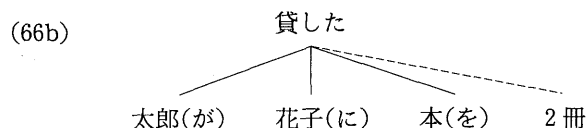


のようになる（各補充成分と述語との格関係は、文が生成する時に、個々の述語成分との共起により自動的に決まるのであるものであり、その格関係を表す格助詞を括弧にしたのである。以下同じ）。つまり、各格成分は、述語成分に強く依存し、線状的に述語成分へ係っていくのである。強い階層をなすと言えば、それは、述語成分が上位（主成分）で、補充成分が下位（従成分）であるということであろう。

しかし、2.3において述べたような修飾成分があった場合はどうであろう。内容修飾成分は述語成分のまとめた叙述の内容量を豊富にするものであり、述語成分にかかるものであるから、同じく述語成分に支配されるはずである。例えば

(66a) 太郎が花子に本を2冊貸した。

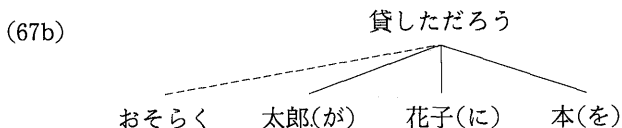
のような文は



のようになるはずである（実線は補充成分との関係を示し、点線は修飾成分と述語成分との関係を示す）。つまり、「2冊」は補充成分ではないが、述語成分を修飾している、即ち述語成分に支配されていることから、また、補充成分と同一のレベルにあるのである。また、陳述修飾成分も述語成分の陳述のあり方を修飾するもので、述語成分の陳述の助動詞に収まるのである。例えば

(67a) おそらく太郎は花子に本を貸しただろう。

という文の構造様式は、以上の理由で

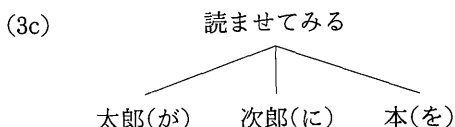


のようになるはずであると思われる。つまり、「おそらく」は「だろう」と呼応し、言語主体の態度を示すが、やはり、「太郎が花子に本を貸した」と同一レベルのものであると考えられる。

また、冒頭にあげた北原保雄の例

(3a) 太郎が次郎に本を読ませてみる。

も、「読ませる」が複合語であるがため、



のようになるはずであり、「させる」が「次郎に」と関係するのではなく、「読ませてみる」全体が一語になって、「太郎が」「次郎に」「本を」を支配するのであると思われる。

以上の分析によって、文核（または骨ぐみ構文）の場合、補充成分と統括成分とは時枝や北原の考えたような階層をなさないのみでなく、文（sentence）の場合も、係り受けという関係においては、階層をなさないのである。

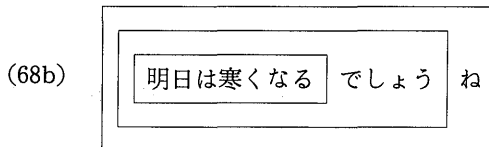
しかし、係り受けという関係においては、階層をなさないのであるが、主体的表現において表現された文の姿は少し違う。もともと「言語は、その言語社会の成員がお互いに協力し、影響を与え合うための、恣意的な音声記号の体系である」（田中春美他1975：16）。また、言語の性質は、社会的に見れば、コミュニケーションのための道具であり、言語学的に見れば、一種の記号体系である。つまり、言語はコミュニケーションのためのものである。例えば、阪倉篤義（1982：31）は、岸田国士の『紙風船』という一幕物の劇曲を分析し、全く場面を異にする空想的対話を除いた191回の発話を次のように分類し、

(一) 平叙（希望・推量・解説・叙事などの内容を持つ）の発話	102	54%
(二) 疑い・問い・反問の発話	59	30%
(三) 勧誘・命令の発話	22	12%
(四) 応答・呼びかけの発話	6	3%
(五) 詠嘆の発話	2	1%

『このうち、(五)の詠嘆の発話は直接聞き手に向けられるものでなく、いわば非伝達の発話であるが、これは全体の1%にすぎない。その他の四つは、いずれも何かを聞き手に伝達しようとするものであり……』とまとめた。したがって、文は、ほとんどが伝達（コミュニケーション）に使われるものであるということが分かる。しかし、話し手が何かを表現する時、必ず何かの情報・内容がなければならない。例えば、

(68a) 明日は寒くなるでしょうね。

という発話には、「明日が寒くなるコト」という情報・内容がある。これを、渡辺実氏（1971）の術語で言えば「叙述内容」である。次に、話し手には、その内容についての認定作用が働く。この文では、「でしょう」という推量の助動詞による推し量という認定作用が働くのである。最後に、「ね」によってこの発話は聞き手目当てであり、即ち聞き手に伝達する文であることが分かる。つまり、文には、叙述内容（コト）の層、認定（または独り言の時や何かを見て感動の意を表す時の表出）の層（判断のモードに属する）、伝達の層（伝達のモードに属する）という3つの層があることが認められるであろうと思われる（楊詭人1994）。したがって、(68a)を図示すれば、



のようになるのである。

こうしてみると、主体表現の一まとまりである文は、言語の本質がコミュニケーションの道具であるという立場に立って見れば、3つの階層を有する姿を呈するのである。

5. 結語

以上、文の成分、述語用言の結合価、文核と文の階層について述べてきた。そして、文の連用成分は補充成分と修飾成分とに2分し、更に、補充成分は主要補充成分と副次的補充成分とに2分し、修飾成分は内容修飾成分と陳述修飾成分とに2分すべきであること、また、述語成分は統括し得る補充成分の種類や数などをあらかじめ規定し、その結合能力である結合価によって形成した文核は階層をなさないこと、それに文には叙述内容の層、認定（または表出）の層、伝達の層という3層があることなどの結論を出した。紙幅の制限で、十分に論じることができなかったが、詳しい考察は別の機会に譲ることにする。

文献目録

- David Crystal (1985), *A Dictionary of Linguistics and Phonetics*. Basil Blackwell, UK
 梅原恭則 (1991), <助詞の構文的機能>, 北原保雄編, 『講座 日本語と日本語教育 第4巻 日本語の文法・文体 (上)』, 明治書院
 北原保雄 (1981), 『日本語助動詞の研究』, 大修館書店
 国立国語研究所 (1963), 『話しことばの文型 (2)』, 秀英出版
 佐伯哲夫 (1991), <動詞性述語と形容詞性述語>, 北原保雄編, 『講座 日本語と日本語教育 第4巻 日本語の文法・文体 (上)』, 明治書院
 阪倉篤義 (1982), 『日本語の基礎』, 旺文社
 田中春美・家村睦一・五十嵐康男・倉又浩一・中村完・樋口時弘 (1975), 『言語学入門』, 大修館書店
 寺村秀夫 (1982), 『日本語のシンタクスと意味 I』, くろしお出版
 時枝誠記 (1941), 『国語学原論』, 岩波書店
 仁田良雄 (1974), <日本語結合価文法序説>, 『国語学』第98輯
 ——— (1982), <日本語>, 森岡健二他編, 『講座 日本語学・10 外国語との対照 I』, 明治書院

- (1991), <文の構造>, 北原保雄編, 『講座 日本語と日本語教育 第4巻 日本語の文法・文体 (上)』, 明治書院
- 福田良輔 (1965), <助動詞の機能>, 時枝誠記・遠藤嘉基監修, 『口語文法講座 2 各論研究編』, 明治書院
- 松下大三郎 (1930), 『改選標準日本文法』, 1974年, 勉誠社, 復刻版による
- 村木新次郎 (1991), <ヴォイス>, 北原保雄編『講座 日本語と日本語教育 第4巻 日本語の文法・文体 (上)』, 明治書院
- 矢沢真人 (1991), <修飾語と並立語>, 北原保雄編, 『講座 日本語と日本語教育 第4巻 日本語の文法・文体 (上)』, 明治書院
- 山田孝雄 (1936), 『日本文法学概論』, 宝文館
- 楊 訥人 (1994), <論日語句子的表達層次>, 『解放軍外語学院学報』第4号
- 渡辺 実 (1971), 『国語構文論』, 塙書房
- (1975), 『国語文法論』, 笠間書院

(原稿受理1998年4月17日)